



現場ではたらき、現場にはたらく

——仏教の言葉を学ぶということ——

田村 晃徳

(真宗大谷派専照寺住職、田尻徳風保育園園長、親鸞仏教センター嘱託研究員)

【提題要旨】

「現場」という言葉は不思議なニュアンスがある。それは「現場」とは「体を動かし、その仕事を支えている人や場所」を指すということだ。法事をすることは住職の現場であるが、読書はそのようには思われまいだろう。また、私は保育園の園長であるが、保育の現場と言えれば職員室にいる私ではなく、クラスで子どもたちと生活している保育士を思う。しかし、読書は住職にとり欠かせない時間であるし、職員室での書類作業が保育園を支えているのである。

現場は目に見えるはたらきと、見えないはたらきで構成されている。確かに体を動かすのも「はたらき」である。しかし仏教を学んだ結果、現場を見る目が変わるのも言葉の「はたらき」によるだろう。そのように、仏教を、あるいは宗教を学び、その言葉を知ることが現場へのはたらきを生む。学びにより、同じ現場でも以前とは見方が変わる。それは「現場の再構成」とも言えるだろう。宗教者と現場というテーマに即して、仏教を学ぶことの意味を仏教者の言葉を用いつつ、考えてみたい。

(たむら・あきのり)